

吉田時代と今（60・4・20）

湯淺 佑一（昭3文甲）

今日は「吉田時代と今」という妙な題でお話しするわけなのですが、京一中・三高・京大と
言えば、もうおわかりの方ばかりだと思いますので、あらかじめお渡し致しましたレジメを御参
照ねがいます。大正九年から始まった一高・三高対抗陸上競技の戦績と記録でございますが、ま
ず一高・三高戦のポジションですが、三高時代というよりも、吉田時代、私の青春時代に於ける
私にとっての命（いのち）でありました。

香山蕃さんが主将で第一回の陸上戦には勝ったが、以後大正十三年まで四年連敗という惨たん
たる状況の中で、校論で陸上部解散の声が起こり、これを動機として陸上部の中から、陸上部の
自主独立と陸上部勃興の気運が醸成され、独立というと語弊があるんですけども、当時の背景、
歴史的経過からやむにやまれない自主独立の熱情、覚醒の意欲といった原動力があったように思

図表 I

A	大正9年—大正13年	(5)
B	大正14年—昭和4年	(5)
C	昭和5年—昭和9年	(5)
D	昭和10年—昭和14年	(5)
E	昭和15年—昭和19年	(5)
F	昭和20年—昭和24年	(5)
G	昭和25年—昭和54年	(30)

います。そこで一つ思いだすのは原稿用紙(四百字詰)三百六十五枚に「三高陸上部の統制」と題して書きのこして、京都を去り、東京に転住した私の記録が、三高陸上部誌「白銀の盾」第五巻にあるのであります。因に吉田時代十二年間の最後に、即ち昭和四年に一年かけてそれを書き、昭和五年五月からずっと東京に就職して終戦後、京都に帰ってきたのでございますが、このことは同窓会誌にも紹介されたことがあったわけです。

その問題の「白銀の盾」誌は大正十四年七月、五年振りに一高・三高戦に勝った三高陸上部勃興の歴史的転換期に、主任理事梅谷竜弥氏が創刊されたものであり、ご自分が寄稿された記事で「陸上部は蹴球部と妥協すべきか」と書かれていたことから察して、何か陸上部が独立運動でもやったように思われたかも知れません。けれどもこれは陸上部の練習制度、組織活動等が本当に確立されていなかったのが、Bの時期、大正十四年から昭和四年までの第二期発展興隆時代を確立した、つまり第一次の黄金時代であったということができるわけでございます。別言しますと陸上部のシーズンは春と夏だけで、秋と冬はなかった、そうではなくて秋も冬も加えて一年中即ちオールシーズン制に

図表 II (A B期の陸上部スタッフ)

年度	部長	選手監督	主将	理事	備考
大正九	折竹教授	—	香山 蕃	香山 蕃	
"一〇	大浦教授	香山 蕃	安部 正夫	—	
"一一	大浦教授	大村 紀二	小沢 信作	—	
"一二	大浦教授	巖 栄一	田中 彰寛	中藤 孝	七月二二日加茂植物園グラウンドでの対一高戦一〇〇メートルに内藤11秒0を出す。
"一三	石橋教授	巖 栄一	星名 敬愛 (佐島敬愛)	天野 重安	コーチ…田中、望月、内藤、小沢、別所
"一四	石橋教授	別所安次郎	馬場 武夫	梅谷 龍弥	理事…和田(敏明)、望月、内藤、井街、星名
"一五	石橋教授	内藤 資忠	齋藤 茂	石野琢二郎	理事…今西、星名、馬場、曾根原
昭和二	石橋教授	別所安次郎	湯浅 佑一 (副将…桜井)	榑原 帯刀	理事…星名、馬場、柴田、秋元、武島、丸岡
"三	石橋教授	武島 忠義	鈴木 清	市川 利次	理事…柴田、湯浅、桜井、西村
"四	石橋教授	武島 忠義 (桜井勝太郎)	中江 龍夫	磯前 光輔	理事…武島、湯浅、鈴木(清)、鈴木(茂)、久米、桜井

なつたといふことであります。

それから陸上部の練習組織が班制になつたといふこと。企業経営でやつてる全社的品質管理（TQC）のQC活動ですね。小集団活動が班制なんです。短距離班、中距離班、跳躍班、投てき班、新人班等々に分けて練習するのですが、それを全体のチームワークにまとめるため、いわゆる水平展開というか、理事や主将といつたトップリーダーが総合調整（コオディネート）してチームにまとめて能力を発揮させるわけであります。このオールシーズン制と班組織活動と首脳部のコオディネーションによつて、積極的な鍛練と根性をみがき、効率をあげるとともに継続的な努力を惜しまなかつたやる気が、あの一高・三高戦に三年連勝し、その間、インターハイ全国優勝二年の成果をあげ得たB期黄金時代の秘訣であつたと思います。

そしてBから次のCの時期、昭和五年から昭和九年の五年間がスランプの時期でございます。それからD昭和十年、昭和十四年になつて、今度は二回目の黄金時代と言いますか、強い盛運時代がまいりました。植村君やその他井垣君や安原君、神谷君たちが活躍して一高戦にも勝ち、インターハイでもそれぞれ優勝し、またトラック・トータル優勝するなどすばらしい業績をのこす第二次の勃興時代を迎えたのであります。不思議に五年毎の周期があつたように思うのでございます。はたして次の昭和十五年からの五年間（E）は日支事変から大東亜戦にはいり、惨たんたる陸上部の暗黒時代となつたわけであります。そして敗戦の昭和二十年から三高がなくなる直前

までのF時代は最後としてなんとか有終の美を全うしようと言うので、一高も三高も大いにかんばったと思うのであります。

私はこの戦前・戦中・戦後と、しかもその終戦という非常に大きな転機を経過いたしました、その次のGの時代を含めまして、私の吉田時代といたしたのであります。この昭和二十五年から五十四年までの三十年間、同窓会員のどなたも経験しなかった京都の公安委員長として吉田時代の母校の治安をまもりぬいた意味で、これを付け加えた次第でございます。

私が京都一中に大正八年の四月一日に入りました時は、森外三郎校長。その前が土屋校長で質実剛健な校風でした。森外三郎さんは学習院教授でイギリス等へ留学の後、大正六年京都府立一中校長に就任されたわけです。入学した時の訓辞に「君たちは今日から中学一年生である。中学一年生だけれども君たちを紳士と見なす」。新入生なんですから満十三歳です。中学一年生に対して「今日から君たちは中学一年生であるが、私は皆さんを諸君を一人の紳士と見なす。従って例えば呼びすてにもしない。従って今後は紳士として行動してもらいたい。」というその生徒の自立心と言いますか、これはまあ同窓会の会報に書かれた方もございますが、その通りでございます。自立心に訴える。そしてそういう高い理念に基いた教育方針、いわゆる大正デモクラシー、生徒に対して強制するということをや嫌った。もちろんこれも自由と言っても自由放任主義

ではないわけですから、自己規律を非常に要求され、自分自身で考えてやるという方法でございました。

そうした大正デモクラシーの典型とも言ふべき自由な風潮と言うものを森外三郎先生は入学式に訓辞されました。そしてその雰囲気というものがノーベル賞の湯川君とか朝永君を生んで行ったのであります。と同時にまた政治家は比較的少なかったですけれども、政治の方にも、あるいは政治評論家としても、あるいはまた大学教授等に進んだ方も非常に多かったです。自由な風潮が一中にあった。人格主義の精神がですね。

私はスポーツは小学校五年から有隣小学校で少年野球というものが初めて日本で始まった時にやったわけでございます。けれども中学に入りまして、二年の時から五年まで野球の選手を實際にいたしました。その時は森外三郎さんは三高の校長に大正十一年になられまして、また我々は三高でもお世話になったわけでございます。大正十二年に丁度私が一中四年の時です。野球では三番、四番を打ち、そして足の方も自然に野球をやっている間に相当速くなったりして、ダイヤモンドを一周するのに十三秒台で走ったわけです。いわゆるスポーツマンシップというものによって裏付けられた一中精神を身につけたのです。その時代の私どもの先輩と言うと、大正十二年には古海先輩が三高野球部のキャプテンであり、島田勲さんが選手監督であり、その人たちから

御指導を受けておったわけでございます。だから吉田時代と言いましても、だいたい三高をベースとした一つの自由の精神と申うか、それがずっと浸透しておったわけでございます。スポーツの面におきましても、私どもはいわゆるスポーツマンシップによつて裏付けられたスポーツの真髓にふれることができた。つまりスポーツの世界には前以てどんなに強い相手であっても、それを避けて行くことはできない。そういう手は絶対に許されない。自分の方が劣勢であると思つても、これは先輩の方々がそれを指摘されている通り、決して猪突猛進するのではなく、冷静な判断の上に立って飽くまでも全力を尽くし、そしてベストを尽くしてやる。そして自分の使命と申うか、自分に与えられたポジションを守りぬく強い責任感と申うか信念と申うか、そのスポーツマンの精神と申うものを、今申しました例えば古海先輩の如く、あるいは島田先輩の如く、この吉田時代に我々スポーツ選手の典型と思つていたのでございます。

島田さんは戦争中、あの沖繩の運命が決まった時に、誰も行く者が無い時に、自ら進んで大阪府の内務部長から向うに行かれたのです。丁度大阪の内務部長をしておられた時、私も戦争時代の労働問題と取り組み、徴用工員と一緒に軍需工場で働いて体を張つてやつておつたのです。當時私は大阪府下の高槻本社工場で専務を兼ねていたので内務部長の島田さんとおつき合いをさせていただいたのです。島田さんは進んで男らしく難局を引き受けてあの沖繩へ行かれました。そして御承知のように花も実もあるような善政を向うで布かれたのであります。島田さんは警察畑

をずっと歩まれたんですけれども、これも御承知の方もあろうかと思えますけれども、警視かなんかになった時に、部下の訓辞に対して丁度今の公安委員長や我々が話すように警察官というのは国民から信頼されなければならんと、愛される警官にならなければならんと、そして正しく強い警官にならなきゃいかんと、あるいは杓子定規なことはいけない、視野を大きく持たなければいけないと話し、その為に危険な思想だという風に思われて、内務省でもならまれ、地方まわりをずっとされて、そして最後に大阪の内務部長として就任された時に、またお会いしたのであります。

そしてあの島守りの塔でああいうように華々しく現地で最期を遂げられました。沖繩復帰の前に日本から今の鹿内氏とそれから今里氏と五島昇氏と私のこの四人で沖繩へ経済視察団ということで行きまして、あの島守りの塔へ参り、現地をつくづく話を伺い非常な感動を受けたのでございました。

そうしたこのスポーツ精神、アマチュアスポーツ精神、スポーツマンシップによって裏付けられた熱血的な愛校心と申しますか、そういうものを我々は、吉田時代に身を以て体得していたのであります。

だからして京都一中においては、一中のために愛校心でやり、それから三高では三高の愛校心

でやり、京大においては京大の愛校心を持って臨み、そしてそれがやがて愛社心にもなり、やがて愛国心にも繋がっていったのでございます。丁度三高陸上部のいわゆる大正十三年のくしきめぐり会いというものは、そうしたスポーツの方だけではなしに、蜷川知事がその当時京都大学の経済学部の大学院の学生でございまして、それが三重一中から来られた山本安之助校長、森外三郎さんの次の校長でございましたが、その時に法制経済の先生で初めて私の五年の時に教えにみえました。私は最初に蜷川知事に教えられた生徒の一人でございます。でその時には、どのような試験問題だったかと言いますと「労働は商品なりや」。中学生にとつて「労働は商品なりや」というのは非常に難かしい問題でございまして、大へん我々は困った経験を持っております。けれどもその当時から蜷川さんは人間尊重ということを非常に重視し、またいろいろみんなの信望を集めておったのでありますが、私は京都一中で野球部の主将をやり、また生徒役員長なんかもやらされました、いろいろ一中の学友会の文化活動ですね。そういう風なもの先頭に立つて、野球を一緒にやった京大の文学部長をやりました井島 勉君とか、そんな連中も一緒だったんです。

けれどもそれが奇しくも御承知のように何十年か後に私が京都府の公安委員長、蜷川知事の公安委員を務めなければならんという不思議な因縁になった。その前に七年間、高山さんの下、京都市公安委員となった。これは京都二中が全国優勝した年の選手監督であり、小西作太郎と高山

義三とこの二人のバッテリーで、現在の高校野球の基を作られた。大正四年に丁度私が小学校の三年の時でございますが、その時優勝した府立二中の選手の中には、勝島先輩とか中島先輩や活躍された方達のプレイを親しくグラウンドで見たいものです。そのなかで松本清一という方が母校有隣小学校の先輩だったものですから、四年生ごろから野球のコーチをお願いして練習をはじめたのでございます。

それから先ほど申しました愛校心は愛社心になり、愛社心は愛国心になるという話をしたんでありますけれども、丁度終戦直後、あの経済同友会が、出来た時には、日本はまったく焦土に等しい状態にあったのでございます。でその時に経済同友会は昭和二十一年の四月三十日に創立總會を開きまして、これを天下に発表いたしました。それを一つ御紹介いたしたいと思えます。「日本は今、焦土に等しい荒廃の中から立ち直ろうとしている。新しき祖国は人類の更生と世界文化に参与するにたる真に民主主義的な平和国家でなければならぬ。日本国民は古き衣を脱ぎ捨て、現在の経済的、道徳的、思想的退廃の暴風を乗り切って、全く新たな天地を開拓しなければならぬのである。しかし、これは並々ならぬ独創と理性と意欲と愛国の熱情とを要する大事業である。」うんぬんと宣言をいたしました。みんなが同志的に、それぞれの会社の利益というものはなれて、個人的ないわゆる同志の結集体としての同友会なるものが出来たのであります。今日の同友会はずっかり墮落していると言いますと語弊がありますが、全然変わっております。

すから、その当時とは違います。その当時は本当に純粋な、それこそアマチュアリズムに通ずる精神によってこういうような宣言をしております。そして同時に関西経済同友会の関西支部の国際経済研究会というものが、同じく二十一年の十一月三十日に「日本貿易の進むべき道」として、こういうことを提案しております。「日本は関税の全面的撤廃を世界に宣言せよ」という提言でございますが、こうした情熱をもやした動機の根源にあの愛校心というものが、そこにまで筋を引いてきたのであると思いますと、真に感慨無量なものがあるわけでございます。

自身の成績についてはいろいろ記録がございますが省略させていただきます、先程申上げました三百六十五枚の原稿について触れますと、三高陸上部の練習組織として、コンティニユアス・ハード・トレーニング（積極的鍛練）の必要を強調し、京大医学部の笹川久吾先生（スポーツ医学の権威）の論拠を取り上げて猛練習を続ける合理性というものを証明しようと思つて、それを書いたことと、それから一つは先ほど申しました練習制度のオールシーズン制ということと、それからもう一つは班制ですね。グループシステム、いわゆる今のQC活動ですね。それを続けてやつたことでございます。

そして私が三高に入りましたのは大正十四年で、その時に私は当然野球をやる予定であつたのでございます。野球部に入る予定で、四年の頃からその志をもつていたのでございますが、五年

生の時、大正十三年に京都のインターミドルがございまして、京都府立植物園グラウンドで十月十七日の秋晴れの日、一〇〇米の決勝で11秒4というその当時の陸上記録としては、中学記録としては最高の記録を出し、その決勝審判員に三高陸上部の梅谷理事がおったわけでございます。そこで私を見出したということで、当時は一中・二中・同志社・京都一商・大谷と言ったところが京都での強力チームでございました。

その時、二中の選手監督をしておりましたのが桜井勝太郎君だったわけで、彼はジャンプもやり、それからスプリンターでもあったのです。それも梅谷さんのスカウトの的となり、さらに暁星中学の鈴木清君、一中で槍投選手だった西村英一君（後に京大の競技部長）たちに四年連敗の屈辱を雪ぎ、三高陸上部を勃興させるんだという非常に強い熱意でもってスカウトの輪を広げておられた。本当にそうした情熱を持って三高陸上部の悲況を訴えられると一種の義侠心みたいなものが湧いてくるのかも知れません。私はその熱意に感動して段々陸上部に入るといふ決意がたまっていたと思うのであります。ところがそのために野球部に入るといふ二、三年來の方針とぶつかりまして、野球部と陸上部とがスカウトの争奪戦を演じる結果となり、大変もめまして、馬場陸上部主将、合田野球部主将それから両部の先輩、理事の合議となり、結論は私の自由意志によって決めろという事になったわけなんです。それで私は非常に困難な状況にあった陸上部に投じて、第六回の一高・三高戦に臨んだのでございます。これがたいへんな激戦になりました、

41対40と言うわずか1点の負けで最後の1600mリレーを迎え、最後に一高を胸一つ抜き去って三高優勝となったのであります。その時のメンバーはトップが馬場、それから二番が神山、最後は鈴木清。鈴木清は全くの新人でございますがね。

それが最初三高には馬場・忠田というオリンピック級の選手がおったけれども、1000mで二人が等外となり、新人の私が二着に入って、貴重な二点を先取したのであります。(一着は一高小池、三着は島津久大君)。

一高・三高野球戦の最初に一番バッターに立つ、あの気持私はよくわかるんですが、私は一高・三高陸上部戦に三年間一番バッターに立つ、最初の一000m決勝にはずーっと三年間出たわけです。しかも不思議に一高・三高戦には非常に強かったわけでございます、一年生のときは1000mで二着に入り、2000mには馬場さんが23秒8、私が二着に入りました。その前の800mリレーでは、馬場・忠田と私とそれから鈴木清のこの四人で一高に勝ちました。しかし2000mで私はもう立てなくなつたわけなんです。という事はその一高・三高戦の二週間前に肉離れをしたんです。主任コーチは内藤資忠先輩で非常なファイターでして、私を鍛えてくれた。特訓ですね。その二週間前の肉離れは誰にも言わなかつたのです。またそれは口実にはならんぞと言われ、足で走れなければ手で走れ、アームモーションだけで走れというような、そういうものすごくきつい発破を掛けられる特訓を受けて、そしてもう無我夢中で、一高・三高戦には全力を傾

倒して最初の貴重なそれでも4点と $\frac{3}{4}$ ですか、1、2、3の制度だったですから、もう一六〇〇mリレーに三高が勝たなければ、一高が勝つと言う最後の土壇場へ追いこまれ、一六〇〇mリレーに出る選手が大変なことになった。まづ神山君という副主将格で三年生、理乙から慶応大学へ行っただけですけど、バリキマンでしたけれども、とても四〇〇m難しいというような状態だったんですけど、それに出。それから二年生の文乙の岸上君、最高裁判所の判事になったんですが、一中では私と同級だったけれども、四年から進学。馬場主将が第一走者で一高を押え、神山第二走者で一高に抜かれ、岸上第三走者で離されずにと維持していつて、最後の20mほど差のあったのをば鈴木清君がおっかけて行って、そして最後に一高の小池選手を抜き、三高が久しぶり、五年振りに勝ったのですが、その勝利の感動というものは今も忘れることができせん。

別所先輩がその時の主任監督であつたわけでした、別所先輩というと非常にフェアなレ、フェリ―としてラグビーでは有名な方ですけども、やり投げの方の選手でもありまして、その薫陶を受けたのが、西村英一君であり中江君であつたわけですが、歴代仲々一中も三高も槍投げは強かつたわけなんですけれども、そういう事がございました。

それから今度は大正15年でございます。大正15年の第七回一高・三高戦は本郷弥生ヶ丘へ乗り込んで行ったわけでありまして。斉藤茂君が長距離の選手だったんですけども、陸上部のキャプテンで私は一〇〇、二〇〇、四〇〇に全勝。一〇〇mが11秒6、二〇〇mが23秒8ですが、それ

から四〇〇mが54秒4、一周二五〇mのグラウンドで二〇〇m23秒台は始めてであり、そして一六〇〇mリレーには20m程一高をひきはなして勝ちまして、ただ八〇〇mリレーだけは、意外性が起こりまして、一高が三高にわずかの差で勝ったわけでございます。それで結局46点半対37点半という9点の差で以て三高が涙をのんだのです。けれども、それから一週間後の第一回インターハイでは、私は四〇〇mで52秒8で優勝し、三高はトラック優勝をしながら、最後の二六〇〇mリレーを棄権したものでございますからトータルで負けたわけなのです。惜しい負け方をしたんでございます。

それから三年目の第八回一高・三高戦では二年の鈴木清が非常な馬力で、また新人でございましたが、神戸一中から来た鈴木茂君が八〇〇mで優勝したんであります。鈴木清君は獅子奮迅でございまして、そしてその当時の星名とか馬場とかいうような選手監督の名がそこにはございまして、すべて全部略しますけれども、前年負けたのと同じ点差の9点の差で三高が勝ちまして、そして第二回インターハイでは私もインターハイには全力を挙げ、最後の二六〇〇mリレーだけは出まして、そして六高を破り、全国優勝したというのは昭和二年でございました。

鈴木清君は三高で一年遅れたんですけれども、三高の陸上部のために遅れてくれたと言ってもいいぐらいで、鈴木清君が今度はキャプテンで第九回一高・三高戦にも勝ったわけであります。一〇〇mから五〇〇mまでやったわけでありまして。ちょっと十種競技どころの騒ぎではないん

であります。

さてそういうような、私に影響を与えた先輩や同僚のおかげで、スポーツ精神というか、三高のスポーツ精神によって培われたファイトですね。それからどんな苦難にぶつかっても、不屈不撓それをのりこえて行く根性というようなものを、身を以て体験したことと、何よりも大きかったことは、やはり自分の心の中に常に永遠に生き続けておる三高の自由の精神と言うか、三高スピリットと言うか、またそういうものによって心と心の繋りのでたチームワークですね。そんなことがやがて実社会に出て今日に至るまで、心の底に生き続けておるのだと思っております。

それから今度は国体の方に移るんでありますけれども、昭和32年、京都府体育協会会長を引受け、昭和六十三年二巡目の国民体育大会が京都府を中心にひらかれますので、その所管担当の責務を仰せつかって居りますので、そのことをご報告申し上げます。京都のスポーツ界は元来輝かしい伝統と歴史をもっていることは、ご承知の通りでして、戦後最初の国体は昭和二十一年、西京極グラウンドをメイン会場として開催され、いくなれば京都が発祥の地ということになっておるのであります。

「新しい歴史に向かって走ろう」というスローガンで府民総力をあげて「京都国体」スポーツ

の祭典を京都らしい特色を出しながらやろうという事になったわけでございます。いよいよこの七月の三日には正式に「京都国体」が日本体育協会、文部省から決定されることになりました。それから各競技会の会場になる京都府下各市町村、府下各市町村の86%が会場になる、このあいだの島根の国体は東西に長かったが、京都は南北に非常に長い地域となる、86%というのは戦後の新記録でございます。

今度の特徴について細かい事は省略いたしますけれども、19歳を基準として成年、少年に分け、開かれた国体の趣旨から成年に一部、二部を設け、中学生にも出場する途を開いたのであります。それで総合成績の採点方法も非常に簡略化し、わかりやすくし、種目別個人競技と団体競技との比率を一對五として採点する。それから中学生でも参加出来るといいましたが、競技力の向上の観点から15歳未満の者であっても、特に優秀な選手に限り、少年の部に参加できる。しかしあまり過大にならないように、全体の参加人員は現行より増やさないように制限をしております。それから大学生の出場の拠点は出身高校の所在地と現住所の二ヶ所に限定して登録が出来るわけでございます。

その他に主催の府県が希望した場合に限ってデモンストレーションゲームを実施できるのであります。ボーリングですね、今度は国体の競技に入っていました。そこで「京都国体」ではデモンストレーションとしては、① ママさん（主婦）バレー。② 高齢者のゲートボール。③

ジヨギング。④ 綱引き。これはオープンで競技得点には入れない。

それから、7月3日に正式に国体が決定するので、今まで準備局だったのが京都府国体局という事になります。そしてそれによっていろいろ予算の方も出てまいりました。だいたいどれぐらい掛るかと申しますと、大会の運営費は30億、35億円です。ただいろんな施設、道路とか諸建設の費用、これはだいたいまあ二五〇億円と見ております。三〇〇億円ぐらいは出るかもしれません。それを京都府にスポーツ基金制度として40億円集めよう。それに対しては、スポーツ寄付金に対する特別の大蔵省免税という処置が講じられるわけであります。それであとの一般募金の方をその40億のうち、20億は一般募金にしてもらい、財界の方にはその20億のうち10億をおねがいしたいと。そしてあとの半分を、一つ体育協会加盟のそれぞれの団体がございまして、そこでもってみんなで集めてもらいたいと言うので、だいたい五年計画、63年度の終わりまでかかって、これは相当スポーツ熱が上がってまいりまして順調なスタートをきっておりますが、現在は七五〇〇万円でしたか、その程度しかまだ集まっておりますけれども、今後例えば商工会議所等において、またその他の団体に協力する委員会を設けるとか、それから加盟団体もそれぞれの所で一つ五年間に亘ってやろう、そして国体を契機として健康作り、府民ぐるみのスポーツ体育振興の幅ひろい底辺が定着することを期待するものでございます。今度の国体はそうした「新しい歴史に向かつて走ろう」というスローガンの下にあります。

さきほど京都国体の資料を御紹介いたしましたけれども、86%の市町村の競技場でそれぞれの競技が行われます。それでちょっとわかりにくいような競技があったように思うんですけども、銃を持ってずっと走って行ってそしてスキーをやりながら、そして射撃をする。これは自衛隊の人なんかやるんじゃないかと思うんですけども、そういう競技もあります。バイアスロンか、それからその他まあ変わったことは今まで水上関係の方は琵琶湖を利用してやったんですが、今度は舞鶴湾を利用して、あそこでボートをやるということ、あそこに漕艇庫も建造し、それからカヌーの競走の方が丹後半島久美浜で行なわれる。それから宮津湾でヨット、そういう風に日本海の方でやる。それからその他市町村がまだ残っておりますけれども、それらは炬火リレーの接続点、採火拠点にするとか、それからその旅館を民宿として提供するとか、そういうような何らかの形でみんなが参加するのでございます。福知山なんかはいろいろと軟式庭球や、銃剣道や、バレーでございますか、なんかだいたいぶたくさん向うでやります。そのためにあの付近にございます所、例えば北では夜久野町、大江町、三和町、それから南の方では笠置町とか南山城村とかは本当に三重県近くの所まで行く最南端でございますが、そういう所で一つは旅館のサービスで参加しようと、そういうようになりまして一〇〇%の京都は市町村各界層全部挙げてやると、こういうような事になるわけで、これは京都が日本で初めてのことになるわけであります。

どうぞ全力を挙げて我々は一つになって、「京都国体」をみんなの力で成功させたいと、念願

してやまないでございまして、どうか三高同窓会のみなさん、有志の方に対しまして御理解を賜り、また適切な御指導を賜わりそれから御支援、御協賛を賜る事をお願い申し上げます。今日の私の話を終わりたいと思います。

どうもありがとうございました。

(湯浅電池株式会社代表取締役会長)